



非営利任意団体 「生」教育助産師グループ OHANA (愛知県)

活動テーマ **未来ある子ども達の生きる力と心を育む 助産師の「生」と「性」の教育活動**

活動の概要

学校などの教育機関に出張し、助産師の視点で生と性を伝える『いのちの授業』を行っています。授業では、いのちの始まりや胎児の成長、誕生の仕組みなどをわかりやすく説明。学年による成長発達段階を考慮し、学校側の意向に合わせて、生と性の両面から内容を構成しています。教育機関に出向くことで、広く子どもたちのこころを育み、『自尊心』や『自己肯定感』を高めることにつながっています。また、公共施設や民間施設では、低学年と高学年、男女別の親子参加型など、対象に合わせてさまざまな切り口で講座を展開。参加者が、家庭での温かいコミュニケーションを高める機会となることを願い、必要に応じて相談にも応じています。児童養護施設においても、生徒や職員を対象とした講座や相談事業を展開し、地域によるサポートの必要性が周知されることを目指しています。



子宮内に見立てた袋に入り、胎児の気分を味わう体験の様子です。子どもの成長に合わせてわかりやすく工夫された授業に、子どもたちも興味深く聞き入っています。

活動の経緯

助産師だからこそ響く言葉がある

助産師には、子どもたちの健やかな「生」と「性」を守る予防教育の役割もあると考え、2013年より教育活動を開始。「生」と「性」の両面を助産師の視点で伝えることで、子どもの自殺や性被害、虐待の予防、親の子育てや性教育の支援を目指しています。



妊婦ジャケットで母の思いを体感したり、子宮を袋で表した実演で出産を学びます。

『いのちの授業』でこころを育む

『いのちの授業』でいのちの尊さやこころの性的アイデンティティを実感。自尊心・自己肯定感を高め、他人を大切に思うこころの成長につながっています。さらに育ててくれた家族や周囲への感謝、性別を超えて互いの存在を認めあうこころが生まれています。



カードに開いた針の穴が、受精卵と同じ大きさで聞き、じっと見つめる子どもたち。

1万人強の参加者から地域へ未来へ

活動開始の2013年には5講座で80名だった聴講者が、2017年には55講座で5,230名となり、合計で11,810名に。『いのちの授業』で得た子どもたちのこころの成長は未来をつくる学びとなり、家族や他者、社会に拡大できるのがすばらしい点です。今後は地域全体のこころの平和につながることを期待しています。



クイズに答えたり、胎児の画像を見ながらお話を聞いて、いのちの大切さを考えます。

参加者の声

- げんきにうまれてくるのはきせきなんだとおもいました。おかあさんにかんしゃしたいです。これからのいのちをたいせつにします。(小学2年生)
- お話を聞いて、お母さんが一生けん命ほくを産んでくれたので、「自分はお母さんお父さんにとって大切なそんざいなんだ」と思いました。もしこの授業がなかったらずっと「自分なんか」と思っていたと思います。(小学4年生)
- クラスにいる一人ひとりがあんなふうに感動的に生まれてきたんだと考えると、とてもうれしくなります。ここまで大切に育ててもらって、親には感謝でいっぱいです。(高校生)
- 男の子への性教育の話が聞いて良かった。なかなか他に聞いたり、相談したりできなかったので!! (男の子のお母様より)

3つの工夫

進め方の工夫

活動内容が分かるパンフレットや教材を作成し、教育機関や公共機関に配布。ネットでの告知も随時行っています。また地域の各機関の方々や情報を共有し、必要に応じて連絡や相談ができるように心がけています。一宮市市民活動支援センターの相談窓口も利用し、運営について常に相談しながら進めています。

連携の工夫

年度始めには、実施予定の教育機関に活動内容や活動報告を書面で配布し連携を図っています。授業が学校での教育内容と合致してより効果的に子どもたちのこころに届くように、出張授業の前には必ず打ち合わせを実施。内容に関する学校側の希望と教材の使用について多様な家庭環境に配慮しつつ確認しています。

継続の工夫

教育機関に必要な教育活動と認識してもらうため、授業後に子どもたちの感想を書いてもらい、効果が伝わるようにしています。今後は、公的な事業として多くの子供たちに分け隔てなくいのちや人権について考える機会が提供できるよう、教育委員会や市への働きかけをより一層行っていきたいと考えています。

将来の活動の方向性

一宮市内すべての小中学校で授業ができるように、公共事業化を目指しています。また、今後は児童養護施設での活動がロールモデルとなり、地域の方々に「さまざまな境遇だからこそ地域社会のサポートが必要」と認識していただけることを目指しています。